表現学説を問うということ
ーシンポジウムに寄せてー

半沢　幹一

今回の「表現学説を見直す」というシンポジウムで取り上げられた、今井文男・塚原鉄雄・土部弘の三氏が、表現学会の活動に偉大な貢献をしたことは改めて言うまでもあるまい。と同時に、三氏がそれぞれ芭蕉俳諧、中古文学、国語教育の分野で著名な研究業績を残したことも広く知られている。この三氏において、表現学とこれらの研究分野とは、どのような関係にあったのだろうか。

表現学会は会則第2条に「言語表現に関する研究を推進」と、その目的を示す。ちなみに、日本言語学会は「言語の科学的研究の進歩・発展」（第2条）、日本語学会は「日本語研究の進展」（第4条）という目的を掲げる。違いは「表現」という語が入るか否かである。

この自明とも思われることの確認をするのには二つの理由がある。一つは、研究対象としての「言語（日本語）」と「言語（日本語）表現」との関係を問いたいからである。もう一つは、言語（日本語）あるいは言語表現の全体を包括し、かつ有効性を持つ学説あるいは理論の存在を疑うからである。この二つはともに、表現学会という学会の存在意義を明らかにすることにつながるものである。

単に「言語（日本語）」と言わず「言語（日本語）表現」と言うとき、それは『表現研究』の表紙裏の「表現学会入会のすすめ」に述べるごとく、「表現の機構を体系づけ」ること、そして「あくまでも言語表現を基盤として、それに関わる人間のさまざまな営為をとらえる」ことを主眼とする。つまり、言語それ自体としてではなく、言語と人間とを「表現」（受容を含む）という過程として捉えるのが表現学なのであり、そのことに自覚的な、あるいは重点的な研究を行うのが表現学ということである。

その意味で、表現学という立場あるいは観点は、言語学（日本語学）における一つの立場の研究として包摂されうるものではある。さらに、その立場を維持する限り、文学研究であれ、国語教育または日本語教育の研究であれ、「表現学的」と称することができよう。ただその際の表現学とは、ある一つの演繹的な理論や学説としてではなく、個別・具体的な各々の言語「表現」（作品）の実例に即した、帰納的な形でしか成り立ちえない。

つまり、今回のシンポジウムで取り上げられた三氏の学説は、まさにそれぞれ専門の研究分野があるからこそ、そこにおいて、それぞれの表現学という立場としてありえたのである。（共立女子大学）